

内房の各地は、かつて首都圏の海水浴場、臨海学校地として数十年にわたり栄えて来ました。しかし、現在は湘南地域に人が流れ、街の灯は消えてしまったかの様になっています。

こうした状況にあって、昨年オープンした保田漁港の「ばんや」は増設しても収容できない客が押し寄せています。すでにオープンした三芳村の「鄙の里」も村を上げての産業となっています。

また4月25日にオープニングイベントを開催する、富山の「道の駅」(富楽里・とみやま)は、総面積5,000坪を超え、建物1,600万坪の壮大なものです。失礼だが、この小さな富山町としては、17億円も投資した大決断と賞賛される快挙であり、うらやましいことでもあります。また、経営も全て町内優先とした第三セクターで運営され、働く人達は活気が満ちていました。しかし、ここまでくるのには、以前から道路公団と数年に渡り打ち合わせを行ってきたと聞いています。

君津では、館山道・君津インターがまもなく開通しますが、周辺開発は具体化しておりません。この対応として、新しい英知と創造力、そして決心も私達には必要だろうと思っています。

幸い、私が提案し平成15年度事業として取り上げられた「希満塾」がまもなくスタートします。都市開発委員会の活動とともに大きな期待をするところです。

地元商業の活性化策を考えるにあたり、私によって立つところは、従来型の他から大型店やキーテナントを呼んでくるのではなく、あくまでも地元が主体的な役割を果たし、街、農、漁、山島の特産物を大切に、そこで街の人々が働き、お互いが潤うような形の活性化策であるべきということです。